

同志社時代の蘇峰

杉井六郎

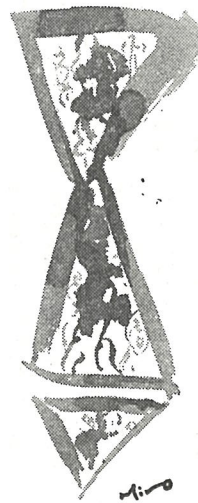
—
徳富蘇峰がみづからの著作目録で一番古いものとしてあげているのは、明治十七年、蘇峰満二十一歳の一月に脱稿した「明治二十三年後の政治家の資格を論ず」である。

「自由・道徳及儒教主義」(明治十七年十二月刊行)「第十九世紀日本の青年及其教育」(明治十八年六月脱稿)がこれに次ぐ。周知のように後者の著作は明治二十年三月公刊されて「新日本之青年」となっており、非常な評判をえたのであるが、実はこの著作より満一年おくれて、明治十九年五月に起稿され、十月に脱稿した「将来之日本」は一足はやく『新日本之青年』にさきんじてかれの処女公刊本となった。それはさておき、これらの諸著作はかれの大江義塾における研究と教育の中から生まれてきたものであった。

それは例えば「自由・道徳及儒教主義」の稿本を見ると、それは五章に分れているが、その一章(一回)は、明治十七年五月下旬に

起稿され、七月三日に脱稿している。かれはこれをさらに十月十五日にいたって改竄・消書をはじめ、その日の午後九時半に終わっているが、その識語に「村塾尚^い暗^く声アリ南窓燈火ノ下ニ書ス」とあり、また、終章の末尾には、「十七年十月二十二日夜八時擲筆村塾吟^いの声転た激す」とあって、大江(生)逸すなわち蘇峰は、生々した塾教育実践の場でこの筆を進めており、そこには、大江義塾生の躍々とした生活の息吹きが感じとられる。「義塾を松下村塾たらしめざるべからず」とした蘇峰は、この著作において、すでに、コブデン・ブライト・ミル・スペンサー・ミルトンをあげて縦横の筆陣をはり、「第十九世紀日本の青年及其教育」、「将来之日本」の論陣の基礎を構築しおわっていた。

青年(塾生)には希望があり、したがって、かれの論旨の展開には、情熱が溢れねばならない。しかも、それは「夢物語」でなく、現実の時務策でなくてはならない。教師蘇峰はかく考え、青年を鼓



舞した。すなわち、「自由・道徳及儒教主義」の終章の結句において、

「速ニ我邦ヲ一変シテ純乎タル自由ノ邦トナサンコトヲ欲スルノ一点ニ帰スル也。吾人ハ固ヨリ（中略）哲學者ニアラズ、天下ノ人心ヲ籠絡シ一世ノ知勇ヲ推倒シ（中略）名譽ヲ博セントスルノ政治家ニモアラズ、固ヨリ學識卑ク天下ノ大事ハ決シテ吾人黃口ノ喙ヲ容ル所ニアラザルヲ信スト雖モ時事ノ日ニ非ナルヲ思ヒ、國勢ノ日ニ焦瘁スルヲ思ヒ、改進黨ニ度愈ヨリ遲鈍ナルヲ思ヒ、自由ノ愈ヨリ其ノ力ヲ社会ニ失フヲ思ヒ、維新革命ノ大業ノ中途ニシテ荒廢スルヲ思ヘバ、身ハ維陽少年ニ非ラサルモ、痛哭長太息セザラント欲スト雖モ能ハザルナリ（圈点筆者）（下略）」

これはまさしく青年客氣の政治論である。これがそのまま、自由民権左派に荷担するものでなかったことは、かれの後の著作に明らかであるが、ここにはまさしく『新日本之青年』の志が、『将来之日本』の期待が、そして、『吉田松陰』の熱が秘められている。

『将来之日本』ついで『新日本之青年』さらに雑誌『國民之友』に展開される蘇峰像は「自由・道徳及儒教主義」の蘇峰の姿にかえって考え直すこと、『吉田松陰』でいえば、明治二十六年、さらには、明治四十一年の年代から明治十七年の蘇峰にさかのぼって追究してみなくてはならない問題がここに提出される。

私が表記のような題をかかげながら、ことあらためて、蘇峰の著作における「自由・道徳及儒教主義」と、かれのその後の著作の關係に執着したのは、蘇峰の思想形成、あるいはその思想の本質を解く鍵がこの辺にもあるのではないかと思うからである。もう少し大

きく言えば、いわゆる蘇峰の「変節」は思想史的にはたして変節といえるかどうかという問題を持っているからである。

二

由来若い時代の蘇峰、とくに、二十歳以前の蘇峰、それは、かれが自らを意識した二回目の熊本洋学校入学（十二歳）から同志社時代、ついで大江義塾の時代にわたる期間であるが、これは『蘇峰自伝』を唯一の典拠としていたことは周知のことである。とくに、その同志社時代については、『蘇峰自伝』の叙述はほとんど神話化されて、それは、そのまま、同志社当年の事情を代弁するものであり、蘇峰のキリスト教信仰は新島襄を信ずるものであり、それは、当年の金森通倫をとき、横井時雄を論ずるさいにも引用されてきた。ところが今年の夏、秦理事長、塩崎彦一氏らの厚誼によって、二宮の蘇峰堂（現在の蘇峰記念館）に収蔵される蘇峰の当年の目録・覚書・随筆などの手記を見ることができ、まさに青天の霹靂、行きづまっていた私の蘇峰における純乎とした泰西主義と純乎とした日本志士の論は、『一刀両断』という鮮やかさは少々誇張に過ぎるが——蘇峰は『新日本之青年』五章でこの言葉を使っている——大きな光明を見つけたことができた。史家は所与の史料を眼光紙背に徹して検討すべきであるとはつとに教えられたことであったが、自伝の史料の制約という先入主から深く読みとることを怠り、史料収集に力を注がなかったことが強く反省された。

すなわち、『蘇峰自伝』の十一、「基督教に對する懷疑と予」のなかに、「予も人並に毎夜必ず祈禱をして居たが、如何なる事を祈った乎と云ふ事を、祈禱した後にそれを書き付けたものがあった。

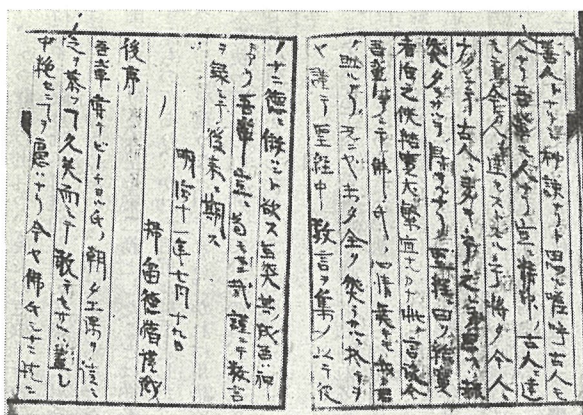
今から見れば、訳もたわいも無きものであるが云々（下略）というくだりがある。蘇峰が奉教趣意書に署名し、同志社にきて、新島襄から洗礼をうけ、新島宅の京都第二公会に入会するのは、明治九年十二月三日のことであるが、その後のかれの奉教生活が、当時の同志社人の人並みと質的にどのように対比せられるものであったかは、かれの神観・新島観、そしてその後の懷疑、公会の脱退という現象に眼をうばわれて、「祈禱した後にそれを書きつけたものがあった」という重大な事実認定も等閑にしてしまっていたのである。

「今から見れば、訳もたわいも無き」とは蘇峰の後年の追懐による評価であって、当年の事實は、人並みの対比の中で質的に論及されねばならぬ問題でなければならぬ。

私が「朝夕工課 第一号 明治十一年七月十九日 No. 1st Note Book Morning & evening exercise」と稚拙な筆で小冊子の表紙にし、したかれの祈りの書きつけを手にしたときの慚愧と歓喜は名状し難いものがあつた。識語にかしこまって「掃留徳猪謹識」と書きつけてあるのを見て、胸の高鳴りは禁じがたいものがあつた。蘇峰はどんな理由からパウロの故名思を称したのであるうか、金森通倫はパウロを名のつたといわれるが、蘇峰はかれに契められて東京英語学校から同志社にきたのであり、しかも蘇峰が下級生の助教であつたが、これはどのように理解すればよいのか。意欲を駈り立てる問題が薄紙の丁をめくってゆくうちに、木全祝との関係、杉田勇次郎との関係、同心交社の問題、かれの立言家としての志望など山積するにいたつた。

この「朝夕工課 第一号」は、明治十一年七月十九日から同年九月六日にいたる手記であつて、蘇峰は当年満十五歳であつた。かれはビーチャー (Beecher, Henry W.) の十二徳にならつて、聖經十徳をかかげ、朝の祈り、夕の祈りにおいて、自らかかげた十徳に倅ることがなかつたかと、罪の意識はすぐれて熾烈である。かれの掲げる十徳とは次のようなものである。第一、神ニ対スル職務、第二、人ニ対スル職分、第三、希望責任、第四、溫柔、第五、謙遜、第六、勤勞、第七、沈黙、第八、親切、第九、儉約、第十、清潔である。そこにはニューイングランドの持っていたアメリカのピューリタニズムを新島から享けた色彩がきわめて濃厚であるといえよう。

蘇峰の祈りにはさらに次のような特徴があげられる。紙幅の都合で、月日、朝夕を省略して一部を抜萃すると、「願クハ十徳ヲ守リ期望責任共ニ天下ノ重ヲ任シ、天下ノ重ニ堪ル身体ヲ持チ、又ハ十分ノ文章モ出来ル様ニナシ給ヘ」、「木全(祝)松尾(敬号)竜山(昇)部、奥(竜太郎)其ノ他ノ人々ヲ善クナシ給ヘ、何焉日本モ十分ノ国トナル様ニ奉願並何卒同心交社主義変化之事御意ナラハ叶ハセ給ヘ」、「天下ヲ憂ヘ与論ヲ導ク之人物トナリ、身体文章モ之ニ適スル様ニナシ給ヘ、又人ヲ知ルノ學問ヲ学ヒ更ニ彼ヲ知ルノ出来ル願ニナシ給ヘ」、「何卒々々異日之目的ヲ達スル様ニナシ給ヘ、願クハ恒ニ慨然トシテ天下之重任ヲ一日モ忘連サル様ニナシ給ヘ」、「願クハ果敢ノ人トナリ、絶愛ノ人トナル様ニナシ給ヘ、何卒心志ヲ鴻大ニシテ異日之目的ヲ達シ、身ヲ以テ国ニ任スル様ニナシ給ヘ」、「身願クハ天下之先導トナリ、萬事は二通フ様ニナシ給ヘ、大



(朝夕工課 第1号 明治11年7月19日)

久保(真次郎)モ私ノ関係ヲ保チ互ニ親ク互ニ遊ム様ニナシ給ヘ」
 「何事モ清潔ニナリ、考案モ緻密ナリ粗暴ニナラス、身天国之重キ
 ニ任シ慨然天下ヲ憂ヘ、偏ヘニ宝ヲ天国ニ議スル様ニナシ給ヘ」と
 祈る。十五の早熟な掃留は、日本を案じ、天下を思い、文章の練達を
 思い、輿論の先導を願う。当時まだ身体の丈天でなかったかれは、
 他日の天下の重任を果すためにも健康を祈願する。それは、「純然

たる基督の徒」であり、封建を脱した「新しい人間」の像が写し出されている。しかも小市民の祈りではなく、経国の志士の願いがあり、日本をこよなく愛する近代的な志士の祈りがにじみ出ている。

ただ、かれがこの朝夕の祈りを書きとめるに当たって、自分がかつてピーチャーの朝夕工課を読んでこれをまねようとして

年月を経たが、いままであえて、断行しなかったのは、中途半端でやめてしまうことをおそれたのであるとみづから誌しているが、かれの朝夕工課は、その年の九月六日でおわっている。では、この時点を境にして、蘇峰における奉教の姿勢は色あせていったかというに、実はそうではない。後掲のように、「隨筆 第一集」の末尾には、「今日は明治十二年十月三十一日なり、今や此の隨筆一編を書き終り(中略)言ふことあらんとす。(中略)余既に十七年(数え年)矣身弱く智力鈍く才力薄く徳行あらず、嗚呼又何を希ひ何を頼んで勉焉筆を取り忽々書を読む乎。蓋有故余性謫劣と雖も既に造化ノ一分たり、豈に自力を賤み天神の思に叛む可き」と敬虔な姿勢を堅持しており、しかも、やはり後掲の「隨筆 第二号」においては、随想風に、「我国今日ノ文明ハ誰レカ与ヘタルモノソ、我国今日ノ聖徒ハ誰レカ出来シタルモノソ、我国今日ノ聖教ハ誰レカ初メテ伝ヘタルモノソ、我輩ハ之レヲ思フコトニ未タ嘗テ感泣セシンバアラザルナリ」と同志社を与えられ、新嶋先生を与えられ、教師を与えられたことに深い感謝をささげている。しかも、同じ冊子に見られる次のような記述は、看過できない。

「Sir Thomas More 氏が神ニ事へるお以テ第一義トシ王ニ仕ルを第二義ニスルト云ハレタル事アリ。此之語ヤ当レリ。誰ニテモ此之語ニ従ツテ可矣。(中略)主人ハ神ヨリ尊トセネハナラヌナラハ神ノ命ニ反スルモ主人ノ命ニハ反ス可ラストスル乎、然ラハ、主人ガ神ニ反ケト云ハ己レハ神ニ反ク可キ乎、是レハ殊ニ主人ニ而モ限ラス萬事ニ通用シテ可矣。嗚呼吾輩ハ此ノ一義ニ着眼セシテ可ラン(明治十三年)三月十八日之午前十一日書ス」

これこそ日本キリスト教の最も重大な命題となるべき問題であり、かつ蘇峰の出自や、後来の意識・行動のなかで、奉教の姿勢を保持する限りは不可避的なものであった。それをこの段階で、かれは信仰の純粹さにおいて、神に事へることを第一義とし、王^二近代国家における天皇を第二義としたことは従来の通説をまったく否定するものであり、かれの信仰が純乎としたクリスチャンのそれであったことを窺うことができる。かれは用語に天皇を使わず、王、主人を使って、これを述べているのは、たとえ「不許他見」ではあっても、慎重を期したのであろうか。

四

そもそも二宮の蘇峰記念館に収蔵される蘇峰関係の史料は、どれほどの多きにのぼるか、私はまだそれを知らない。私が閲覧しえた蘇峰の同志社時代の手記は、この「朝夕工課」のほか、「心乃塩梅思乃鏡 第二号 桐庭学人」（明治十一年九月二十九日—同年十二月六日）、「隨筆 第一集 鉄研学人（鷹灘学人）」（明治十二年六月—同年十二月）、「隨筆 第二号 鷹巢学人 徳猪生」（明治十三年二月—同年三月）、「虚々秋光 隨筆第三 鷹巢学人」（明治十三年三月—同年四月）、「所見所聞 鷹巢生」（明治十三年五月—十五年七月）の薄紙小冊子に書き綴られた六冊である。

周知のように、蘇峰は明治十三年三月英学校五年生であり、二年生の学級合併問題に端を発した事件で、卒業直前の身であったが、新島襄の再三にわたる翻意をふり切って退学し、その五月東京に出る。「所見所聞」に見られる五月二十五日書き出しの東遊漫記日録記事はきわめて劇的である。この日を境にして、かれは一時新島の

膝下をはなれるのである。

「行李肃然余河辺湯浅ノ二君ト今出川ノ寓居ヲ出ツ、其ノ送りテ新嶋氏ニ至ルモノハ唯井瓜、奥、河辺文、松田、御建、西山、津田而已。新嶋氏ニ立寄りシニ、今日ハ案内ノ事ニテ余輩^{抹消}甚タ不快ノ心ヲ生セリ而シテ此ノ困中ニ居ル公義ノ困ハ如何ソヤ。十一新嶋ヲ出ツ、公義送テ三条橋ニ至ル、橋畔魚万ニ立寄り共ニ会食ス、家ハ橋ノ西北ノ隅ニアリ、窓ヲ推セハ向岸ノ柳色青々トシテ情ヲ含ムニ似タリ、献筆東山淡謗覆ハレ、梵覺ノ美人梳ニ慵キ情ノ如シ、彼ニシテ有情ナラシメハ余将ニ如何セン。於是乎無端旅思起矣（下略）」

いまこれを『蘇峰自伝』のこの項と対比検討する紙幅をもたないが、「今日ハ案内ノ事ニテ（中略）甚タ不快ノ心ヲ生セリ」とは自伝に見えぬ感情であり、昼食を三条橋ほとりでたべたとき、向岸の柳を見て、美人の梳にものうき情の如し、「彼ニシテ有情ナラシメハ余将如何セン」、「無端旅思起^{はなはだ}」も同じく自伝に見られぬ人間蘇峰の赤裸々な姿をうかがえる。

今年にはたまたま徳富蘇峰が逝って十三年、百敗院泡沫頑蘇居士の十三回忌にあたる。こうした秋に当って故人を泉下に起して、これと対応することができることは、私にとって非情な因縁とも思えるのである。同志社において純乎たる基督の徒となろうとする掃留は、大江義塾の純乎たる泰西主義唱道者と照応し、民友社における平民主義の鼓吹につながっている。その意味で同志社時代における掃留は泡沫ではない。

蘭亭を愛しむ^{らんてい}お

秦

恒平



「大学問題」では書けないと断わってあったのが、折り返し、他のことでもいいからと重ねて執筆依頼の届いた今日、上野の東京文化会館で第二十回美学会全国大会があり、勤めの合間をすり抜けるようにして私は旧師や先輩の顔を見に出かけた。演題には幾らも聴きたいものがありながら休暇もとれず、僅かな昼休みの立話だけをめあてに行って、案の定耳にしたのは専ら紛争による大学荒廃の評定ばかりであった。

勤め柄、各種の医学会を傍聴取材する機会があり、最近ではそれらの殆どが、造反教官や学生の激しい動議、抗議、妨害で流会になっている。流れない学会は、たいてい事前に青医連と学会責任者の間で相当な取引があるのだとも、事実かどうか、耳にしている。年とった学会長を何時間も壇上に釘づけにする激しい吊し上げも見るに忍びないが、取引の蔭で微温的に行なわれている研究発表というのも、味けなく佻びしいものだ。

他のことはともかく、医学部に就いてならわれ編集職の者は存外沢山の見聞をもっているはずであり、私にも相応の評判位はできるのである。だが私はそれをしたくなかった。所詮、身振沢山な「評定」に終りそうな気がするし、それなら寧ろ黙ってじっと見ていたいのである。むろん、弦を離れた矢は的を追って鋭く飛ばねばいけない。いつとき期的を見失なうことがあるにせよとにかく矢が途中むなしく地に落ちないことを私は願わずにいられない。穏便な分別などというものを、この際そう信用すべきではない、と思っている。

私は望まれた「大学問題」に就きこれ以上書く気がない。何も書けない。書けないことと、それが私にも非常に重い大きなこと柄だということは、何も矛盾しないのである。

美学会の会場を出ると、直ぐ近くの国立東京博物館まで私は小走りにかけた。時間も惜しいし、何となく今耳にして来たような

話題から早く離れたい気もちだった。

新たにできて間もない東洋館の中を靴音を響かせて歩きつけ、むろん一点一点に費す暇もないまま、唐三彩や、宋の白磁や董其昌の書の前では、思わず爪先立っても佇ちどまって、眼を据えて、見ずにいられなかった。

中にも心を惹かれたものに、定武本の蘭亭序があった。後代の五字損本か、あるいは歐陽詢臨書のままの未損本か確かめられなかったが、王羲之真筆の風韻を最もよく得たと謂われる名蹟であり、無性にありあり眼に残った。「蘭亭殉葬」とか「賺蘭亭」とかの故事まで、奔るように脳裏をかすめた。

突然の話題で恐縮だが、松永久秀という武將は、信貴山落城の際、愛蔵の平蜘蛛の釜を織田信長に奪われるのを無念に思う余り、釜と一緒に自ら火に入ったと謂われている。戦国末期武將の茶器酷愛を伝える挿話としては最も念の入ったもので、ちょっと想像に余る所がある。

平蜘蛛の茶釜がどんな物であったか、評判だけでは納得できないのだが、およそ今日に遺された当時の茶器具をあれこれ著名なコレクションで観たり、また稀々茶会で実際に手を触れてみても、美術品としてはみな限界のあるもので、光悦、光琳、のんこうら本格の仕事になるまでは、ただ茶人好みというばかりの茶入、茶杓、花筒、土茶碗など、なるほどそれなりの興味は感じられても、決して大騒ぎするものと思えない。茶人仲間では何の彼のと謂ってみても大概が「お道具」で、例えば東京博物館にある邢州白磁の盞や、元横河博士の蒐蔵であった宋官窯の輪花青磁鉢と

か、三井家のやはり輪花の青磁馬蝗絆などと、気格、精緻、雅趣において匹敵する独立独歩の美術品は稀と言うよりない。

愛しむに値する芸術的な名品を惜しんだのなら久秀のしたこともある意味で首肯されるが、冷淡に謂えば乱心に過ぎず、逸話と謂うより汚名に近いのである。

これに較べると、似たことでも、唐の太宗皇帝の蘭亭殉葬など、賛成はしないが、酷愛の対象が王羲之の墨跡だけにずっと納得しやすい。支那、日本を通じて書道の世界に久しく冠絶君臨し大王と謂われた羲之の、自身最も得意の蘭亭詩序であり、この人の真蹟なら百千を厭わず蒐集していた太宗が、わが死後にもこの蘭亭だけは俱に埋葬して呉れるよう、子の高宗に遺戒を加えたと言うのは、さもありそうで、熱愛の余りの独占慾という以上の、もはや不可思議の祈願であったかと推量される。

平蜘蛛の釜がもう見られないように、蘭亭原本もおそらく永久に見ることを得ないが、幸いこの名筆には多くの掲模が遺されていて、真蹟の韻致をうかがうことはできる。ただわれわれが、開皇本や定武本と謂われている碑帖を観て、どれだけ真価が分るか、ちょっと覚束ない。

しかし、万葉集には既に「羲之」「大王」などの文字を、「てし(手師)」と訓ませているのであり、筆墨の名手として彼が奈良時代までに揺ぎない名声をわが国に博していたことが分かる。正倉院には双鉤填墨本ながら、王羲之流を伝える高名な智永の真草千字文が現存し、光明皇后らの雄偉な筆跡などにもひたすら王羲之を学んだ跡がうかがわれる。

まして支那において王羲之とその書がどれほど尊重敬愛されたかは蘭亭殉葬ひとつを挙げて、もはや十分であろう、およそ断簡零墨も、石に刻して碑帖に遺墨を集められたこと、彼に及ぶ者は古今に例がない。

羲之は三国の後、東晋の貴族であり、四世紀中葉の人である。字は逸少、仕えて右軍將軍、会稽内史となり、王右軍と呼ばれ、子の献之を小王と謂うに對して大王と讃えられている。その書は「文質彬彬として君子なるかな」と評され、「字勢雄逸、竜が天門に跳り、虎が鳳閣に臥すが如し、故に歷代これを宝とし、永く以て訓となす」と謂われ、さらに「王右軍の書は、謝家の子弟の、たとへまた端正ならざる者も、爽々として一種の風氣あり」と語られた。謝家は当代名家の一と思えばよい。

筆力雄勁、羲之が木に書く時、墨色は深さ三寸も木の肌に浸透したという伝説は、例えば今日一般に使われている岩波の国語辞典にも、入木道、即ち書道の別称としてちゃんと採録されているのである。

それほど名高い蘭亭詩序そのものに就いて謂うと、晋の穆帝の永和九年三月三日、当代の名士四十一人が会稽山陰の清流蘭渚の小亭に会して、曲水に觴を流し禊事に寄せて遊んだ。この時、銘々に詩を賦したものに酔余の羲之が筆を把って二十八行三百二十四字の序を作ったが、彼はその序がよほど得意であつたらしく、後にも同文で幾度となく書き新ためたと謂われる。

しかし結局最初原稿本のでき栄が秀れていて、彼はとり分けそれを自分の家に遺した。唐代にこの蘭亭に就いて詳しい考を成

した何延之という人に依れば、この極上の真蹟は第五子に当る王徽之の家に伝えられ、七代の孫の智永禪師の珍重秘藏する所となったが、智永に伝うべき子のないまま、蘭亭序は弟子弁才に譲られたのである。

同じ頃、唐の太宗は憑かれたようにこの蘭亭を探していた。太宗の王羲之愛好は異常なばかりで、既に多くの墨跡を内府に宝藏していたが、一番有名な蘭亭詩序を欠いていた。そこで探索が進んで、漸く智永禪師の弟子弁才が所持しているらしいと分かった。早速差し出すべく勅命があつたが、弁才も蘭亭ほどの名品を惜しんで、先師没後の所在が知れないと逃げを打ち通した。事実は真蹟を箱に蔵い、屋根裏の梁を削貫いて隠していた。

埒もあかぬまま太宗にはどうしても弁才の言うことが信じられない。遂に、当時御史の官にあつた蕭翼という者に、何とか弁才と渡り合つて蘭亭真蹟を手に入れよと命じたのである。

蕭翼は思案のあけく商人の姿に身をやつし、予め二、三の王真蹟をも太宗に借り受けると、都長安から遙々弁才の住持する会稽の永欣寺へ出向いた。彼は巧みに弁才の知遇を得、俱に詩を賦し碁を囲み、また琴を撫し書を談じ合うに至つたし、弁才もこれほど才識ある市人と友誼を厚くすることを心から悦び相許したのである。遂にある日、弁才はその秘匿する蘭亭を梁から取り出して蕭翼に誇った。

蕭翼は、しかし一瞥しただけで少しも感心しない。世上大王のにせものは横行して居り、失礼だがこれも真赤なにせものだと言つて願ない。流石に弁才は面白くなかった。蕭翼はやおら自分の

持ちものを披いて見せ、これこそ上乘の間違ひない王羲之であると逆に誇る始末だった。

弁才は師所伝の蘭亭を今さら疑う訳ではないが、いささか氣勢をそがれ、さりとて蕭翼を警戒もせず、つい所用でそのまま寺を留守にした。蕭翼も一度は一緒に出たが持ちものを忘れて来たと言つて一人戻ると、机上に置かれた蘭亭もろともまんまと持ち出してしまった、謂わば賺しとつたのである。蕭翼はその足で当地の官に行き御史蕭翼と本格を以て名告り、今は堂々と弁才に勅命の趣を告げ、蘭亭を召しあげた。

弁才は驚ろき失望し、鬱々のうちに一年余で死んだと、何延之は「賺蘭亭」の一件を詳しく書き誌しているし、この逸話は唐初の宰相画家、閻立本が同じ題で描いている位だから、まんざらの造り断とも思えない。真偽いづれにしても面白い話であり、蘭亭詩序の原稿本が太宗に帰したことは間違ひなかつたのである。

やがて太宗は掲書の巧みな四人に命じて銘々に数本の摹写をつくらせ、皇太子や諸王に賜っている。今日に遺された蘭亭はこれら摹写本を刻して拓にとつたもので、真蹟は太宗が次の高宗皇帝に遺命して、固く玉匣に納めてわが墓の内に封じさせた。

むろん太宗の蘭亭殉葬はさまざまに批議の加えられる所である。

ただ、太宗と久秀とを較べてみて、もとより物自体は共に天壤間唯一無二ではあれ、貴重な文化財としての値の大いさはとても比較にならない。しかも真に惜しむべき王羲之の蘭亭を地中に埋没させた太宗の執愛が存外激しい非難を受けて居らず、何ものにも

せよたかが茶釜一口を抱いて自焚した久秀が良く言われないのは、さかさまのようで、やはりそうではないと言わねばならぬだろう。永久に喪なわれたのは痛惜に余りあるが、愛しむに足る蘭亭であつたことが、却つて太宗の酷愛を首肯させるのである。分別では批判できても、心情においてよく「わかる」のである。

王羲之を愛し、併せて儒教を尊崇した太宗には、当然そこに政治家としての配慮も加えていたに違ひないが、死に臨んでなお伴侶たらんと祈願した瞬間には、右將軍の芸術を純粋に愛するばかりであつたと想いたい。方法はともかく、それもまた人と芸術との価値ある出逢ひ、宿命であつただろう。却つて、どこか羨み思われる故事であり伝説であり、事柄は決してはや趣味的微温的でない。

博物館をあとに、またしても忙しい午後の勤務に戻って行きながら、やはり大学問題に就いて書くより、これを書くと思つた。

「大学問題」と限つたことではなく、人も、われも、真に価値あるものへの執着であり行動であるなら、なまなかの分別は措いても、と、熱くたけて来る懷いを感じつつ。

因みに、太宗の死と俱に埋葬された蘭亭の運命はさらに数奇を極めた。即ち高宗の妃の則天武氏の時代になって、この稀代の猛女が寵愛した張易之という美男は太宗御陵を無残に発き、悲願むなくこの時蘭亭は再び世に曝されてしまった。これは正史にも誌す所で、しかもその後の蘭亭の行方は、杳として知れないと謂われている。(一九六九、十、十七)

(昭和33文学部卒、作家、医学書院勤務)